じいちゃんとかぶとむし

きずしば　二年　しがもとうめか

ーかぶとむし、いらない。」

でん話を切ったしゅん間、わたしの気分はうきぎのようにはねがえりました。むしかごどうしようかな。えさはなにがいいかな。土とかあった方がいいかな。どこで買おおかなそんなことよい、パパはゆるしてくれるかな。そんなことを考えていると、風せんのようじ頭がふくれあがってきます。

学校へいくとき、いつもつきそってくれるのは、じいちゃんです。じいちゃんは、わたしと弟、妹のために、いろいろなことをして楽しませてくれます。かぶとむしのことだって、わたしたちがよろこんでくれるばずと思って、でん話してくれた人だと思います。姉弟三人で、家中のあちこちをむしかごになるようなものはないか、いしむしかごにならないかようけんめいさがしました。でも、けっきょく見つからず、気もちはあせる一方です。そ

んな中、パパがかえってきました。心ぞうの音が体中をこだまします。

「がぶとむし、かっていいよ。」

にこっとしたパパの顔を見るなり、わたしたち三人は、気もちがぱくはつしきすのじいちゃんはともかく、パパも味方になった。てくれたのです。

それからの毎日は、いそがしいのです。ホームセンターで買ってきたむしかごに土を入れ、おへやがかんせいします。かぶとむしを

おへやへしょうたいすると、なんたがおながすいているように見えました。

「ゼリーをあげてみよっか。」

三人でしょくじ大さくせんを考え、えを用ぜりーをおく場しょと、かたむきがげんをとと

「おなかすいてたんだ、ありがとう。」

チューチューとすってているのが、むちゃむちゃと食べているのか、かんさつしながら見ているとそんな事が聞こえてくるようにがんじ